

Nun komm, der Heiden Heiland: BWV 61 テキスト解説 小林 英夫

(いざ来ませ、異邦人の救い主よ) 【いざ来たれ、異教徒の救い主よ】

待降節第1主日(Sonntag 1 Advents)。初演 1714年12月2日、ヴァイマル。29歳。

台本作者(詩人):エルトマン・ノイマイスター Erdmann Neumeister 1671-1756

聖書朗読箇所: マタイ福音書 21章 1-9節。副次的朗読箇所: ローマ人への手紙 13章 11-14節。

1. Overture (Coro)

第1曲 序曲(合唱)

Nun komm, der Heiden Heiland,
der Jungfrauen Kind erkannt,
des sich wundert alle Welt,
Gott solch Geburt ihm bestellt.

どうぞ来て下さい、すべての民の救い主よ、
乙女から生まれる御子と預言された方よ。
全世界が驚嘆するのを承知の上で、
神は御子の誕生をこのように
あらかじめ決めておかれたのです。

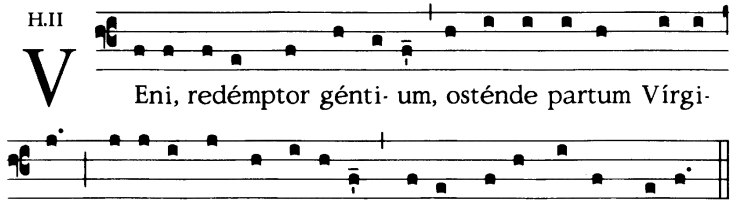
押韻: 1 Heiland - 2 erkannt, 3 Welt - 4 bestellt

この年の3月2日にヴァイマル宮廷の楽師長(宮廷楽長と副楽長に次ぐ地位)に昇進したバッハが、教会暦の新年
度開始である待降節に合わせて書き上げたカンタータで、歌詞はその年に出版されたノイマイスター詩集の第4巻
「宗教的な詩 Geistliche Poesien」によっています。

この日の聖書朗読はキリストのエルサレム入城を描いたマタイ福音書 21章 1-9節で、聖書の文脈の中では受難
の序曲ともいえる部分ですが、キリストの降誕自体が受難(=人々の救済)を目的とする神の現世への登場であった
とする解釈を重ね合わせて、クリスマスの準備期間である待降節に読まれているものです。

第1曲は堂々たるフランス風序曲をバックにドイツコラールが聞こえてくるというバッハならではの組み合わせです。
ここで歌われるコラールはマルティン・ルターMartin Luther 1483-1546作の "Nun komm, der Heiden Heiland"
1524 全8節中の第1節で、このコラールは4世紀末頃のミラノ司教であったアンブロジウス作と伝えられるラテン語
賛歌 "Veni redemptor gentium" から旋律と詩の内容を引き継いだものですので、まずそれらのコピーを掲げてお
きます。

H.II
V
Eni, redemptor gentium, ostende partum Virgi-
nis; mi-ré-tur omne sáeculum: ta-lis decet partus De-um.



(ラテン語歌詞粗訳: 来たれ、諸民族の
贖い主よ、処女の出産を示せ、全世界
は驚く、そのような誕生は神にふさわし
い)

althéridh / Martin Luther 1524

1. Nun komm, der Hei - den Hei - land,
der Jungfrau - en Kind er - kannt, daß sich wun - der
al - le Welt, Gott solch Ge - burt ihm be - stellt.



(なお、この旋律と兄弟関係にあたる
コラール "Erhalt uns, Herr, bei
deinem Wort" と "Verleih uns
Frieden gnädiglich" については
BWV 6 の解説末尾のコピーを御覧
下さい)

フランス風序曲は宮廷音楽のしきたりでは王の入場に際して奏されるという位置付けを持つもので、朗読される聖書の中に、キリストのエルサレム入城は王としての登場であるとする記述(マタイ福音書 21 章 3 節:イザヤ書の預言の成就)があることから、バッハはキリストの降誕(この世界への神の入場)を迎えるにふさわしい音楽として選択したものとされます(宮廷音楽家としての力量を見せるという意図もあったかもしれません)。

このコラールの(従って、このカンタータの)表題の日本語訳として用いられている「異邦人、異教徒」は、「諸民族、諸国民」とするほうがよいという私見を BWV 6 の解説の際に述べておきましたが、バッハもこの第1曲でソプラノ、アルト、テノール、バスのすべてのパートに、詩の第1行の言葉を歌わせており、入場する王であるキリストが、人種・民族・宗教を超えた「すべての人の待ち望む救い主」であることを表現していると解釈できます。

そのようにして四方(東西南北、老若男女)から呼びかけられた救い主は、4声揃って1回だけ歌われる詩の第2行の「御子」に凝縮します。詩の第3行はフーガとなって(緩 - 急 - 緩の3部で構成されるフランス風序曲の急にあたる中間部)上を下への大騒ぎをする世界の様子として描かれ、元の堂々たる雰囲気を取り戻した終結部で、詩の第4行がやはりただ1回歌われます。この第1曲はバッハのカンタータの冒頭合唱としては異色の存在ですが、歌詞の内容に即した表現の結果と見ることができます。

2. Recitativo (Tenore)	第2曲 レチタティーヴォ(テノール)
Der Heiland ist gekommen, hat unser armes Fleisch und Blut an sich genommen und nimmet uns zu Blutsverwandten an.	救い主は来られた、 私たちと同じ貧しい肉と血を その身に受けて、 私たちを血族として受け入れるために。
O allerhöchstes Gut, was hast du nicht an uns getan?	おお、至高の善である神よ、私たちのために 何をあなたが惜しんだでしょう。
Was tust du nicht noch täglich an den Deinen?	あなたの民となった者たちの日毎の必要のために 何の不足を生じさせたことがあるでしょう。
Du kömmt und läßt dein Licht mit vollem Segen scheinen.	あなたは来て、あなたの光を 満ちあふれる祝福で輝かせて下さいます。

押韻: 1 gekommen - 3 genommen, 2 Blut - 5 Gut, 4 an - 6 getan, 7 nicht - 9 Licht, 8 Deinen - 10 scheinen

説教者(教会代表者)が登場して、礼拝の場へのキリストの来臨を宣言します。「私たちと同じ貧しい肉と血を」はルター作の降誕節コラール "Gelobet seist du Jesu Christ" の第2節(BWV 91 の第2曲参照)と共通するキリストの受肉(神の人間としての誕生)の表現で、クリスマスを取引するものです。暦の上での降誕祭にはまだ数週間早いのですが、日々執り行われる礼拝中の御言葉としても、また聖餐式のパンとブドウ酒としても、キリストが現存しているというのが信仰上の立場ですので、教会にとっては毎日がクリスマス=キリスト+ミサ(礼拝)になるわけです。

第2段落の反語的疑問文は、神がいつでも必要なものを与えていることの確認で、やはり礼拝の場において信徒たちに御言葉と、聖餐式のパンとブドウ酒が与えられていることを意味します。キリストの肉と血(パンとブドウ酒、御言葉)を受けることによって信徒はキリストとの血縁関係に結ばれるわけです。

第3段落の「祝福」はいつも礼拝の締めくくり、祈り、求め、与えられるもので、バッハの音楽も豊かに流れ下る祝福を描くようなアリオージョとなっています。

3. Aria (Tenore)	第3曲 アリア(テノール)
Komm, Jesu, komm zu deiner Kirche und gib ein selig neues Jahr!	来て下さい、イエスよ、どうぞあなたの教会へ、 どうか幸福な新しい一年を与えて下さい。
Befördre deines Namens Ehre, erhalte die gesunde Lehre und segne Kanzel und Altar!	御名の誉れを増し加え、 健全な教えを養い育て、 説教壇と祭壇を祝福して下さい。
Komm, Jesu, . . .	来て下さい、イエスよ、. . .

押韻: 2 Jahr - 5 Altar, 3 Ehre - 4 Lehre

第2曲後半のアリオゾから引き続いて、豊かに流れ下る祝福を描写する音楽の中で、教会暦の新年度の開始にあたっての教会のための祈りが歌われます。説教壇と祭壇が特に取り上げられているのは、一方は礼拝における御言葉、もう一方は聖餐式のパンとブドウ酒という、キリストの現存を示すための重要な場であることによるものですが、「御名の誉れを増し加え」には信徒数の増加(=新生児の誕生)が、「健全な教えを養い育て」には教理を学び信仰を深める(ひいては教会を支える聖職者となる)信徒の増加が祈り込まれているように思われます。

4. Recitativo (Basso)	第4曲 レチタティーヴォ(バス)
Siehe, ich stehe vor der Tür und klopfe an.	見よ、私は戸口に立って 扉をたたいている。
So jemand meine Stimme hören wird und die Tür auftun,	もし誰か私の声を聞いて 扉を開く者があれば、
zu dem werde ich eingehen und das Abendmahl mit ihm halten, und er mit mir.	私はその中に入り その人と晚餐をとにし、 その人もまた私のもとで(晚餐をとにする)。

(ヨハネの黙示録 3章 20節)

祈りに答えてのイエスの登場です。ここではすでに赤子のイエスではなく、受難と復活を経て再臨間近のイエスの言葉がヨハネの黙示録から引用されています。この言葉は、最後の審判の前にイエスが各地の教会に宛てて悔い改めを促す手紙を送る、という文脈の中にあるもので、バスのレチタティーヴォが歌うイエスの声の背景には通例の穏やかな弦の和音ではなく、扉を叩く音を模したピツィカートが繰り返されて、今すぐ心の扉を開く(悔い改める=神に心を向ける)よう信徒たちを促しています。

扉を叩いて、開けてくれたら中に入って食事をする、というと何やら物乞いのようなのですが、旧約聖書の雅歌には、若者が恋人の乙女のもとを訪れ、そと扉を叩くという場面(これとて夜這いですので、文部省推薦はいただけませんが、結局乙女が扉を開くのが遅かったため何事もなく)がありますので、イエスから信徒たちへの愛情表現と見ることができます。イエスの声を聞いて扉を開くのもまた信徒からイエスへの愛情表現であり、タイミングが良ければこのように夕食を共にしたり、次曲のように住み着いてもらったりすることができるわけです。この曲では10小節間、39回も扉を叩かせていますので、タイミングが良いとは言えませんが、ぎりぎりセーフだったようです(40回に達したらたぶんアウトになるのでしょう。マタイ福音書4章2節によればイエスの断食は40日間でしたから)。

付け足しのように見える末尾の行は、イエスを晚餐の席に招き入れることが、実はイエス主催の天上の晚餐の席に連れてイエスの肉と血を受ける(イエスと血縁関係によって結ばれる)ことになる、という立場の逆転(=天国の先取り)を明示するために置かれています。

5. Aria (Soprano)	第5曲 アリア(ソプラノ)
Öffne dich, mein ganzes Herze, Jesus kömmt und ziehet ein.	開け、私の心よ、隅々まで余すところなく、 イエスが来て、お入りになるのだから。
Bin ich gleich nur Staub und Erde, will er mich doch nicht verschmähn, seine Lust an mir zu sehn, daß ich seine Wohnung werde.	ちりと土くれに過ぎない私のような者を 主は軽んじることなく、 私に会うことを喜びとし 私のもとに住居を定めて下さる。
O wie selig werd' ich sein!	おお、私はなんと幸せなことでしょう。
Öffne dich, . . .	開け、私の心よ、 . . .

押韻: (1 Herze) - 3 Erde - 6 werde, 2 ein - 7 sein, 4 verschmähn - 5 sehn

第5曲は前曲のイエスからのメッセージに個人的に答える形で歌われます。「ちりと土くれに過ぎない」という表現は第2曲の「貧しい肉と血」に対応しており、その意味では繰り返しですが、教会という場にイエスが現存することと、私の中にイエスが現存することとは、やはり喜びの度合いが違うわけです。

ich seine Wohnung werde(直訳:私は彼の住居となる)は、ヨハネ福音書 14 章 23 節を踏まえた表現です。そのあたりのところは BWV 172(バッハにとっては同じ 1714 年の 5 月の作品です)の第2曲の解説を御覧下さい。また同第5曲の詩を合わせて読んでいただければ、相思相愛の喜びもいっそう深まるかもしれません。

6. Choral	第6曲 コラール(合唱)
Amen, amen!	アーメン、アーメン。
Komm, du schöne Freuden krone, bleib nicht lange! Deiner wart' ich mit Verlangen.	来て下さい、美しい 喜びの冠なる方(花婿イエス)よ、 もう待たせないで下さい。 私はあなたを待ち焦がれているのですから。

押韻: 2 schöne - 3 krone, (4 lange - 5 Verlangen)

終結コラールは、詩がフィリップ・ニコライ Philipp Nicolai 1556-1608 作のコラール「輝く曙の明星のいと美わしきかな」"Wie schön leuchtet der Morgenstern" 1599 全7節中の最終第7節。定旋律も Philipp Nicolai 1599 のものですが、ノイマイスターの台本によって、歌詞も旋律も詩節の後半(実質ほぼ3分の1)のみという変則的なものになっています。

Amen という同意の言葉を早く言いたかったのか、kommen 系の言葉を連ねてきた台本(第1曲:Nun komm、第2曲:ist gekommen, Du kömmt、第3曲:Komm, Jesu, komm、第5曲:Jesus kömmt)の締めくくりとして早く Komm を言いたかったのかはわかりませんが、詩節の最初から歌う時間が惜しいくらいに、待ちきれない状態だったのでしょう。Amen と Komm はヨハネ黙示録のほぼ末尾(22 章 20 節:Amen. Ja, komm, Herr Jesu. アーメン、主イエスよ、来て下さい)にセットになって出てくる、花婿イエスを迎える花嫁(教会)の言葉です。

それを受けてバッハの音楽も和声体のコラールとしてではなく、ポリフォニックなモテト合唱(+ オブリガート・ヴァイオリン)に仕立てられて、喜びが駆け巡り天に翔け昇る音楽となっています。

以上

2002. 12. Koba.